戦後の沖縄集落の住民によって継承された民俗空間及び集落空間秩序の研究

－沖縄県那覇市旧小禄村地区の被接収集落の変遷および再建過程を事例として－

A STUDY OF TODAY'S OKINAWAN FOLKSY DISCIPLINES

－ By tracing the history of sacred spots which were expropriated for the military land,
at OROKU district in NAHA city, OKINAWA pref. －

小野 尋子*, 清水 肇**, 池田孝之***, 長嶺 創正****

*Hiroko ONO, Hajime SHIMIZU, Takayuki IKEDA
and Takuma NAGAMINE*

This paper aims to clarify the today's OKINAWAN folksy disciplines, at OROKU district which has been requisitioned by Army in NAHA City. Research methodologies are interview, document analysis and interpretation of an aerial photograph. To evaluate the appropriateness for case study, first, we draw a comparison between requisitioned settlements and others in folkways. Accordingly, there are really not much difference between two kinds of settlements. Second, we trace requisitioned settlements' history of sacred spots and colonial morphology. Results are followings; 1. Inhabitants has been regarded hilly land as a sacred cow. 2. Settlement's meeting house has been recognized as important facilities. 3. 'Utaki' and other Okinawa's sacred spots has been treasured, but change in shape and quality. 4. The hierarchy between head family and cadet family is decreasing. 5. The south facing street pattern was changed back to back pattern

Keywords: *Okinawa's sacred spots 'UTAKI', Expropriated land for Military, Relocation and reconstruction by residences, settlement geography*
御嶽及び拝所の祭祀空間 軍用地接収 住民による新部落建設 集落地理

1. 研究の目的と方法

1-1. 研究の背景と目的

沖縄の習俗および集落の民俗的特性については、多くの先行研究がある。古くは、柳田國男が『海上の道』を上梓して以降の流れである。『蝸牛考』に示される周囲論的仮説に立つ柳田らによって、沖縄は日本の基層文化を映し出す鏡像という観点から一連の研究がなされてきた¹⁾。他方、柳田らの地域間比較を主眼とする重出立証法という調査手法への反発から、地域の固有性にこだわる研究も進められ、沖縄の集落空間については仲松弥秀²⁾によってその基礎が確立された。建築分野では伊従勉により³⁾、琉球王府時代の祭祀空間の構造について研究がなされている。

しかしながら、これら民俗学・地理学・建築学等の分野で明らかにされてきた沖縄集落の民俗的特性や伝統的な原型は、その重要性は認識されつつも、実際に今日の計画論の中で「何を」「どのような状態で」保全していくべきなのかについての議論は充分とはいえない。

民俗空間および集落空間秩序を計画対象として選別する場合、文化財的価値や美観的価値以外にも、住民の生活の中にどれだけ根ざしているのかといった事実からも検討をしなければならない。民俗空間がどのように地域に継承されているかという事実を計画論として捉える研究は、笹谷ら(1991)⁴⁾が日立海岸と海の祭祀を事例に、新田ら(2002)⁵⁾が淡路島の農村祭祀空間を事例に行っている。一方、特に地上戦と米軍統治を経験した沖縄の場合、消失した集落が多数あ

り、それらの中には住民によって再建されたものがある。一旦消失した集落空間を住民がどのように再建したのか、その再建過程の中で民俗空間がどう扱われたのかは、住民と民俗空間の関わりを知る上で重要な事例であるにも関わらず沖縄の戦後の都市計画及びまちづくりを事例とした既往の研究⁶⁾⁷⁾⁸⁾ではなされていない。

そこで、本研究では、伝統的な沖縄の集落の民俗空間および集落空間秩序が、戦後どのような変遷をたどったのかを集落史的に追跡し、住民による民俗空間の再建の有無や順序・立地という継承の事実と継承に伴う協議や人的金銭的負担を調べることにより、不文律の民俗空間及び集落空間秩序の継承と変容の過程を明らかにすることを目的とする。なお本研究では、「民俗空間」を御嶽及び拝所、全戸南面接道を基調とした区画割り・村屋等の伝統的な集落施設そのもの、「集落空間秩序」を集落基盤や民俗空間とその他の集落居住域とで示唆される集落構造の法則を指す用語として用いている。

1-2. 研究対象地の意義と研究の方法

本研究の目的に沿って、住民によって継承されている集落の民俗空間の要素をより如実に抽出するために、空間改変の機会が多い市街化された農村集落を対象とすることとした。その中でも本研究では那覇市旧小禄村集落の移転と再建を経験した被接収⁹⁾ 5 集落(大嶺・とうま・あしんみ・かざんじ・かなぐすく)を対象とした¹⁰⁾。

研究対象地としての旧小禄村被接収集落の意義は、まず第 1 点目に、戦中から戦後にかけて日米の軍事利用による土地の接収が行わ

* 琉球大学工学部環境建設工学科 助教・学博

** 琉球大学工学部環境建設工学科 准教授・工博

*** 琉球大学工学部環境建設工学科 教授・工博

**** 琉球大学大学院理工学研究科 博士課程・工修

Research Assoc., Faculty of Engineering, Univ. of the Ryukyus, Ph. D.

Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Univ. of the Ryukyus, Dr. Eng.

Prof., Faculty of Engineering, Univ. of the Ryukyus, Dr. Eng.

Graduate Student, Graduate School of Engineering and Science, Univ. of the Ryukyus, M. Eng.

れ、集落をまるごと移転し再建しなければならなかったという特異な経緯による。これにより、限られた予算や土地条件、限られた協議期間という一種の極限状況の中で住民が民俗空間をどう継承したのかは、当時の住民の価値観を検証する上で非常に重要な意義を保持している。第2点目は、旧小禄村被接収集落の復興が、1953年とまだ沖縄で本格的な都市計画が再開されていなかった時期であったことから、日本本土の各種補助事業などを活用することができず、住民による自主再建が行われたことにある。このため、補助メニューや事業採択要件に左右されることなく、住民自らで空間づくりのルールを決めることができていた。第3点目に、旧小禄村被接収集落がいわゆる観光地ではないため、外からの目を意識した特殊な整備が行われていないことである。

図1 那覇市旧小禄村全12集落と被接収5集落

調査の概要は、全てのヒアリングに先立って、小禄村誌⁹⁾、10・10空襲以前の米軍による空中写真¹⁰⁾、那覇市が作製した歴史民俗地図、字史など各字所有資料を参考にして史実を整理し、史実と照らし合わせる形で各時代のキーパーソンに当時の様子を確認する、字議事録を見るなどした。

表1 調査概要^{注3)}

	ヒアリング日時と人数	その他 集落の参考資料
被接収集落	大嶺 2006/02/28(1名) 6/12(1名) 10/26(1名)	大嶺の今昔 ¹¹⁾ 戦前の大嶺の復元模型
当間	2006/3/20(1名) 7/21(2名) 11/1(1名)	当間会館賞状等
安次嶺	2006/3/12(2名) 7/06(5名) 10/31(3名)	高齢者に聞き取り作業中の戦前の安次嶺集落図、字所有資料
鏡水	2006/3/24(1名) 6/19(2名) 10/27(1名)	鏡水 80周年記念誌 ¹²⁾ 鏡水 100周年記念誌 ¹³⁾
金城	2006/7/29(3名) 10/28(3名)	金城会館落成記念誌 ¹⁴⁾ 小禄金城まちづくりの歩み ¹⁵⁾ 戦前の金城の復元模型
他集落	2006/2/20(赤嶺 1名)、2006/03/07(小禄 1名)、2006/03/05(宇栄原 1名)、2006/03/10(高良 1名)、2006/03/08(田原 1名)	旧小禄村字赤嶺調査報告書 ¹⁶⁾

本研究では、住民に継承されている民俗空間及び集落空間秩序を明らかにすることを目的としている。まず、戦前からの継承について調べるために戦前の集落構造をヒアリングと空中写真によって明らかにし(2章)、再建の基本構想に当たる5集落全体での取り組みを字誌やヒアリングによって整理し(4章)、各集落の個別の民俗空間や集落構造について考察を行った(5章)。事実として得られた民俗空間および集落空間秩序の解釈は、再建された民俗空間の有無と順番からは優先度を、再建の理由からは必要性を、再建の場所の選定理由や協議内容からは集落構造の法則を読み解いた。また、協議過程や議論の内容等の「言葉」や「考え方」と実際の集落空間の改変の「史実」との関連性に注意を払って進めた。

図2 調査手法と調査結果の解釈

2. 沖縄の伝統的集落空間の構造と戦前の小禄5字の空間構造

2-1. 沖縄本島南部の伝統的集落空間の拝所と構造

「御嶽」は、仲松弥秀によると村を愛護する祖霊神・島立神・島守神と、祝福をもたらすニライ・カナイの神、航海守護神などに限られており、村の愛護神のほとんどが遠い時代のその村の葬所と考えられ、そこを要として村が展開している^{注4)}と説明されている。御嶽と集落の関係は分離しがたいものであり、本質的には御嶽は一集落にひとつとされている。この御嶽を北側の小高い丘に背負い、根家・宗家と呼ばれる旧家が建ち並び、それよりも南側の下位の場所に分家が建ち並んでいるのが沖縄の集落で多い構造である。集落背面に当たる北側には腰当森と呼ばれる拝所林があり、冬の北風を避ける役割を果たしている。しかし、これらの方位は必ずしも固定的ではなく、それぞれの集落の微地形にあわせて多少ずれることもある。また風水の影響を受ける沖縄の伝統集落では、個々の家が南入りの住宅形式を取っている。仲松¹⁷⁾及びそれ以降の研究¹⁷⁾¹⁸⁾により、概ね、図3の様な構造が沖縄本島南部の伝統的な集落の典型として定義されている。

図3 沖縄の伝統的集落形態と拝所や宗家の位置

御嶽^{注5)}の他にも沖縄の集落空間の中には、住民によって拝み、大切にされている特殊な場所がある。具体的には、殿・神アサギ(神あしあげ)、井泉、龜屋、旧跡、シーサー、門中墓などである。本研究では、住民に拝まれる場所を、総称して「拝所」として定義する。

その他の集落の主要施設としては、集落の自治活動の拠点となった村屋、生活基盤としての村井戸・産井戸・池、萱などを採取する原や毛、若者の集会場所としてアシビナーと呼ばれる原野等があった。

2-2. 集落再建を余儀なくされた5字の戦前の集落構造

沖縄の集落構造の典型的な形は2-1で整理したとおりであるが、これらは集落毎に少しずつ異なる。戦前の各集落の構造について、那覇市の歴史民俗地図をもとに戦前世代へのヒアリングと表1集落の参考資料によって整理を行った。

那覇市の小禄村地区は1673年に誕生した小禄間切に端を発する。

字大嶺は、南東側に上ヌ毛と呼ばれる丘陵を築き、西側の海に向かって開けた集落である。上ヌ毛は、ウフグシク、タマグシクという聖域となっておりこれが大嶺の腰当森になるのだが、大嶺の一番の聖域である大嶺の御嶽は、この上ヌ毛ではなく集落域からかなり遠く字当間の

図4 戦前の大嶺集落

近くにあった。ヒアリングと屋号名分析^{注6)}によると上ヌ毛に近い集落南部に宗家があり、北方向へ開発が進んでいる。総じて道路形態は基盤目状になっている。宅地は必ずしも南面接道とはなっていないが、忠実に復元したという戦前の復元模型では、宗家が多い集落南部では、道路付けに関わらず、南入の住宅となっており、分家の多い集落北側部分は西入りの住宅もある。

字当間は、ヒアリングによると周囲が高く中央部がくぼんだお椀のような地形の集落で、北部に「当間ノ嶽」を擁し、ヌルヤーと集落一番の宗家が御嶽のすぐ南側にある。南西向きに集落が展開する典型的な沖縄の集落骨格をしている。道路形態は基盤目状である。また、空中写真で確認する限り、多くの宅地が南面から道路に接し、南入り住宅となっている。

図5 戦前の当間集落

字安次嶺は、集落南部に「安次嶺ノ嶽」を臨み、安次嶺ノ嶽のすぐ北隣に根家、および宗家が建ちならぶ集落で、そこから扇状に分家が展開している。道路形態はやや整形である。現在字誌を作成中で、その編成委員会が地域の古老への聞き取りによって作成している戦前集落図の各家の建物図によると、集落の各住戸は宗家分家を問わず南入りの家と西入りの家が混在する形となっている。

図6 戦前の安次嶺集落

字鏡水は、他の4字と比較して新しい集落で、明治36年10月21日に独立するまでは字安次嶺の屋取集落^{注7)}であった。そのため、琉球国由来紀に記述されるような、昔からの御嶽は集落内にはない。それに代わるものとして、集落からかなり離れた東側にミーヌシンという航海の神様がある。集落行事ではこのミーヌシンが最初に拝まれる場所となる。集落内の拝所は、一番有力な門中である平良家の平良のお宮、火の神などが中心となる。緩斜面に形成された集落で、平良門中と第二番目に大きい新垣門中等の宗家が並ぶ場所が集落中央よりやや上部にあり、緩斜面を下って南西側に向かって分家が展開している。空中写真によると道路形態は不整形である。集落の各住戸は、空中写真およびヒアリングで確認したところ、多くは西入り又は南西方向入りに建てられていたという。

図7 戦前の鏡水集落

字金城は、集落が所有する戦前の復元模型によると南に向かって下がる緩斜面上に集落が形成されていた。北に、「金城ノ嶽」を擁し、東側の丘陵に門中墓が並ぶ。御嶽の南に宗家が並び、さらに緩斜面を下る形で分家が展開されている。道路形態はやや不整形である。空中写真と復元模型で確認すると、各家とも概ね南入りの住宅となっている。

図8 戦前の金城集落

5字の中では、集落背後に御嶽の無い大嶺と御嶽を持たない鏡水が特殊な集落空間秩序であった。民俗空間では村屋は5字とも集落のほぼ中心部にあり、宗家と分家の立地の階層性も5字全てで確認された。道路形状は屋取集落である字鏡水がやや特殊であった。

3. 旧小禄村地区の戦禍と戦後の土地収用

戦前、字大嶺を中心とする小禄西部は、大嶺平野といわれるほどの平坦地であった。中国との戦争準備を始めるにあたり、小禄村は日本軍にとって地理的位置も立地条件も好都合であったことから、1931年に小禄飛行場建設が着手される^{注8)}。この飛行場建設が、旧小禄村全域のその後の運命を左右することになった^{注9)}。第1回の飛行場用地には、大嶺、当間の2字の非居住地域を当てたのみであったが、その後の戦禍の拡大で軍用地利用が拡大し、大嶺・当間・宮城・安次嶺の全域、赤嶺・金城のほぼ全域、鏡水・高良の大半、具志・田原・字栄原の一部が日本軍によって収用された(図9参照)。

(出典：小禄村誌 p51, p56 を元に作成)

図9 1931年第1回海軍による接収とその後の軍用地接収

10・10 空襲以後の度重なる空襲で、小禄村地域は徹底的に破壊されたのち、1945年6月4日に鏡水海岸から上陸した米軍によって、終戦直後の小禄村はほぼ全域を占領された。そのため、人々は収容所生活をしていた。その後、字小禄・田原・字栄原から開放され、さらに、1947年8月には現地部隊の了解が得られ具志・宮城・高良・赤嶺の人々が帰村^{注10)}、1950年2月には軍施設一哩以内地域における村落形成や家屋の新築などに対する建築規制が緩和され、旧居住地に戻る人や、旧居住地に戻れない人は小禄村役場が軍の命令で「割当土地^{注11)}」として指定した字高良の津間田、および字栄原に随時居住することになる。しかし、その後1953年2月の土地収用によって、再び、宮城・高良・具志・赤嶺・字栄原の一部地域が収容されることになった(図10参照)。その結果、1953年2月時点で、集落全域を収容された大嶺・鏡水・安次嶺・当間と、集落の大部分が収用された金城の集落の人々の多くが割当土地に住み続けることとなり、赤嶺・宮城・具志は自宇の畑地に居住することを余儀なくされた。

(出典：那覇市史資料第3巻の1 p327、小禄村誌 p51 を元に作成)

図10 戦後の土地収用に伴う立ち退き

4. 旧小禄村内被接収集落5字の戦後の復興と再建

4-1. 割当土地居住期の各字の生活(1947-1954)

旧字に戻れない字の人々の当時の生活はどれも混乱し、悲惨であった。米軍が廃棄したテントを張って暮らしたり、トタン葺きの仮住まいを建てて暮らしたりしていたという。一つのテント小屋の中に3つの世帯が同居するような状況もあった。また、戦前純然たる農村だったこの地域では、居住域も畑地も接収され生活基盤そのものを失った人や、居住域は接収されなかったものの旧字に戻れない人々が畑地に割当土地として住み始めたことから耕作が不可能になった人が多数おり、それらの人々は米軍が廃棄する不要品を収集して市で売ったり、米軍の被雇用者として生計を立てたりしていた。

このような戦後の混乱期にあっても、大嶺、当間、安次嶺、鏡水、金城の被接収集落の人々は、各集落の村屋を割当土地近くの低未利用地に建設した^{注12)}。住まいですら全世帯分は無く、住まいを持つ世帯であってもテント暮らしの仮住まいである時代状況にあっても避難所的な使われ方ではなく、純粋な集会施設として使用されていたそう。戦後の混乱期に、いったい何をするために集会施設が必要だったのか、との問いには、合同生年祝いがかなり早い時期に再開された(大嶺)、小禄村内の各字対抗の陸上競技大会が1952年には始まりそれらの練習や応援合戦などを字毎にやるために、集まる場所が必要になった(当間)、村の組踊りを戦後すぐに復活したのでその練習場所として必要だった(安次嶺)や青年会の集まりやサンゴワチー^{注13)}の踊りの練習で使われた(鏡水・金城)など、終戦後のかなり早い時期から年中祭祀や行事が各字で再開され、そのための集会場所が必要だったことがわかった。終戦後すぐに小禄村内で行事が再開した理由は、集落行事が非常に大切にされていた事はもとより、戦争の悲惨さや戦後自分の字に戻れない憂さを晴らす目的もあったのではないかとされている。

村屋の広さは、各字古老の証言によると、それぞれ15坪から50坪程度の民家のようなもので、各字とも、各々の家の住まいがテント小屋やトタン葺きであった当時から萱葺きで建造されたという。またどの字の村屋でも、煮炊きができる最低限の設備があった。これらは、字の集会施設がいかに重要であったのかを物語っている。

また、御嶽及び拝所については、字民から資金を徴収し新たに用地を買収して仮移動を行った集落(当間・安次嶺)と移動を行わなかった集落(大嶺・鏡水・金城)とに分かれた。字毎の年中祭祀での拝みに差が無いことから信仰の強さによって差が出たというよりも、当時は土地の接収が永続的に続くとは思っていなかったという意見があったことから、今後の予測がつかない状況下で集落の中で合意形成が図られないまま推移した結果だと考えられる。

終戦直後の割当土地での仮住まいの状況で確認された集落の空間秩序は、集会施設としての村屋の重要性と、仮移動であっても迅速にはできない御嶽及び拝所が持つ移動困難性である^{注14)}。

4-2. 戦後の割当土地の密集状況と借地人と地主のトラブル

住民の生活が落ち着きを取り戻すとともに、地元の字民(土地所有者)と戦災のため自分の字に帰ることができない人達(借地人)とのトラブルは耐えることがなかった。また他の地域から、小禄村に移動してくる村民は増す一方であった。当時のトラブルと密集状況は、新部落^{注15)}建設移動に関する陳情書^{注16)}からも読み取れる。

戦前の小禄村は総面積 3,099,846 坪を所有しており、12 部落で人口 9,000 戸数 1,800 戸で、文化、経済、教育、その他のあらゆる側面で恵まれ県下でも屈指の裕福農村でありましたが、図らずも去った太平洋戦争の結果、戦前所有していた土地の 70.45%(2,182,709 坪)を軍用地に使用され、現在ではわずか 1,924,277 坪しか残されておらず、あまつさえ、人口は 14,000 に増加し、余儀なく密集生活をしているのであります。(1953 年 1 月 27 日)

4-3. 新部落建設の取り組み(1953-54)

このような村民のトラブルに村議会も黙っているわけにも行かず、問題解決に必要な予算の計上を、民政府・米軍政府へ協力要請していくために、1953 年に村長および村議会議員によって「新部落建設期成会都市建設委員会(通称:期成会)」という非公式な組織が結成された。期成会は5字(大嶺・当間・安次嶺・鏡水・金城)によって結成され、最初に行ったのは土地の買収事業であった。小禄村誌によると、この遂行には、①土地買収を極秘に遂行できる人、②土地買収の経験がある人、③人望厚く信用のある人が選ばれたという。しかし、大規模な用地買収行為を極秘に進めることは困難ですぐに知れ渡り、買収価格や買収期間において行き詰まりをみせた。そこで、「買収候補用地の目くらましを狙い、買収予定地ではない宇栄原のくぼ地にわざわざ担当者が出向いて視察するなど策を練ったが、最終的には、実情を話して地主の協力を願う方向で買収に取り組んだ^{注17)}」という。

買収の資金および新部落建設のための資金は、当初資金が有志によるもので、その後は期成会のメンバーの月々の積み立てと琉球民政府、小禄村からの援助によって準備されていった。各戸当たりの積み立ては月々1000円(B円)であった。ヒアリングによると、この金額は、当時、小禄村役場の初任給が1000円(B円)程度、小禄で多くの人が従事した米軍の軍作業(ガーデンボーイやハウスボーイ)の月給が月々3000~3500円(B円)であったことから、働き手が複数名以上いて食い扶持が少ない家ならなんとか支払える額であったという。

新部落建設用地には、旧小禄村の米軍から開放された山岳地があられた。しかし、高い所では約16mを切り崩し、低い所では約9mを埋めなければならないほど起伏が激しい原野^{注18)}を、現在のように重機もなく、スコップだけで整地するのは非常に困難であった。期成会では、すでに会員から月々の資金を集め用地買収に着手していたため、買収はしてみたもののその土地が整地できず住めないといった混乱は絶対に避けなければならなかった。そのため、政府等に土地を整地するための援助を求める交渉が次の重要課題となった。

最終的に、米軍に依頼して原野の整地をしてもらうことになった。米軍のブルドーザーを3台出動させ、さらに、原野整地の際にブルドーザーを動かす米軍将兵達を、3ヶ月の演習という名目で無料奉仕させた。これが実現したのは、当時村長であった長嶺秋夫氏の人並み

ならぬ交渉力の賜物だと評価すると、米軍が軍用地として接収しているためにおきている事態なのだから、これくらいの協力は当然だと評価する人がいるが、いずれにせよ小禄村の戦後史は米軍抜きにしては語れない。

5 字分の新部落建設用地を買収した後、各字の建設となるのであるが、各字の配置はくじ引きで行われた。くじ引きは、各字から 4 名ずつ出で行われた。くじには数字が振ってあり、4 名の代表が引いたくじの数字の合計点が少ない字から南東側から割り振られていった。このように複雑な仕組みにしたのは、引く順番などで有利不利が出ないようにするためだったという^{注19)}。当選順番は、鏡水→安次嶺→当間→金城→大嶺だった。多大なる苦勞を持って整地された 5 字分の新部落建設用地の全容を、当時の図面(写真 1)から起こしたものが図 11 である。

図 11 新部落建設用地全敷地図

4.4. 制度によらない住民による集落の再建

新部落建設が着手された 1953 年当時、沖縄にはまだ区画整理や新住宅市街地開発の手法が導入されてなかったが、土地の造成の仕組みにはそれらの整備手法に近い方法が用いられた。新部落の造成は当初の基本構想から、1 戸当たり 70 坪分の用地代を負担し、その中から道路用地をそれぞれ供出し、最終的に各戸には 50 坪分の住宅用地を割り当てることが合意形成されていた。自己負担用地の 3 割分を公共用地として供出する仕組みである。その後の実施段階で、将来どの家庭にも車両の乗り入れが自由にできるようにと、東西南北のメインストリートに 5 間、幹線道は 3 間、狭い所でも 2 間という道路案が示された。戦前の小禄村は、大きな道路でもせいぜい 9 尺幅であったことや、どの家でも車を所有する時代がくることなどとても想像できなかったことから、会員からは基本構想での合意にも関わらず、なぜこのように広い道路が必要なのか、その分宅地用地に回したほうがいいのかという反論が多く出たという。

最終的に、宅地は最も広いところで 80 坪程度、狭いところで 40 坪で区画され、それと同時に各宅地は 10 の階級にランク付けして各人に供与された。この土地開発の仕組みの中心的責任を負い、実際に道路や区画割りを行っていたのが、高良正光氏という小禄村役場で吏員として勤め土地係をしていた人であった。この区画割りの考え方に当時の内地の区画整理の技法が影響を与えていたかどうかは記録では定かではない^{注20)}が、制度の位置づけも無いまま進められたためかなり苦勞したであろう。これに関連して、同じく村役場吏員として彼の下につき現場で測量を行っていた長嶺敏博氏は、「現在のような精密機器がなく平板測量のみでこれだけの広さの土地を測量し、階

級付けするのは非常に難しかった」という事を証言している^{注21)}。

階級付けは、メインストリートに面するところが高く、また重機が無いなかでの造成の困難さから、傾斜のある宅地は階級が低く設定されたという。階級別の坪単価に敷地面積を乗じたもので配分後の土地の評価が行われ、その評価額とそれまでの積み立ての額との差額分が再徴収または再分配された。字安次嶺で唯一所有していた当時の計算表(写真 2)をもとに計算すると、一等地の坪単価は 350 円(B 円)。八等地は 90 円(B 円)である(表 2)^{注22)}。また、安次嶺自治会館用地は 10,402 円(B 円)だったことがわかる。

写真2は、分配時の土地評価計算表の写しである。表には、番号、氏名、坪数、金額、備考が記載されている。番号は 173 から 178 まであり、氏名は A 氏から I 氏まで記載されている。坪数は 48.75 から 46.56 まで、金額は 18,525.00 から 4,190.40 まで、備考には 380 から 90 までの坪単価が記載されている。

写真 2 分配時の土地評価計算表

表 2 土地評価計算表から起こした坪単価

氏名	等級	坪数	金額(B 円)	算出坪単価(B 円)
A 氏	1 / 上	48.75	18,525.00	380
B 氏	1	50.04	17,514.00	350
C 氏	2	47.75	14,325.00	300
D 氏	3	46.15	11,537.50	250
E 氏	4	47.75	9,550.00	200
F 氏	5	50.71	7,606.50	150
G 氏	6	63.55	7,626.00	120
H 氏	7	48.00	4,800.00	100
I 氏	8	46.56	4,190.40	90

4-3、4-4 を通じて、5 字が合同で行った時期の新部落建設の過程を整理した。この時期に道路や宅地等、新集落の基盤が大枠で整備されたのであるが、3 割減歩による公共用地の生み出し、車が通れる車幅の道路や背割型の区画等きわめて現代的な整備が試みられたことがわかる。

5. 新部落建設後の字毎の再建過程からみた集落の空間秩序(1954-)

新部落建設のための 5 字の用地が整地され、字毎に振り分けられると、そこからいよいよ本格的な各字の再建が始まった。

図 12 新部落整地後、各宅地に供与される前の集落空間

図 12 は、各字に集落用地が配分された後、個々の世帯に宅地が供与される直前および住宅建設途中に、字毎で計画された集落施設の状況をヒアリングを元に図示したものである。それぞれの民俗空間について以下で検討を行う(次頁表 3 参照)。

5-1. 御嶽及び拝所の移設再建について

御嶽及び拝所の移設再建では、まず立地特性として共通して確認されたのは「小高い丘の上である」という事だった。大嶺は新部落建設とほぼ同時期に取得した区域外の丘陵上の用地に再建、当間是新部落建設用地内で丘陵状であるため宅地に適さないとされた用地を買い取って再度移動、安次嶺は終戦直後の場所のまま、鏡水は自字となった新部落建設用地内の丘陵状になった場所に再建、金城は再建した自治会館敷地内に再建した。御嶽の再建に関連して非常に興味深い認識がいくつかの集落で聞かれた。それは、小高い所を沖縄方言で「シジラカサン(セジ高い)」と表現し、小高い所は霊力の高い聖なる場所なので、人が住んだりするのには適さない恐れ多い場所としたという独特の空間認識である。現在的那覇の市街地では丘陵上でも住宅地開発が進行してしまっているが、「沖縄の昔の人は、小高いところには家を建てなかった。しかし、内地の人が見晴らしが良いということで建て始めてから、それを見て最近では沖縄の人も家を建てるようになった」という事が聞かれた²³⁾。

移動は、どの集落も拝みをして正式に御嶽及び拝所を「移した」という解釈で行っているが、接収地の中にも昔の御嶽があるので、移したのではなく「遥拝所」や「お通し場」²⁴⁾なのではないかという考えの人や、実際に基地内に今でも拝みに行く人もいるそうである。

また、その際の御嶽及び拝所の移設再建に関しては、「御嶽」の場所をまず決め、その場所から下位の場所にその他の拝所(火の神や井戸、時にはノロ家跡等まで)を合祀する形が取られている。合祀された御嶽及び拝所の空間構成は、敷地内の一番高いところ、または中心となる上座に御嶽が設置され、そこより一段低いところもしくは左右に火の神や井戸などのその他の拝所の碑が設置されている。新部落建設時に再建されその後改変が無い大嶺御嶽は図 13 の様になっており、その他の当間、安次嶺、鏡水、金城の全ての集落に共通する構成である。井戸など、元位置に無ければ意味が感じられないような拝み対象でも、個々の井戸毎に碑としてわざわざ再建していることは、民俗空間の認識として非常に興味深い。

図 13 移設再建された大嶺御嶽

御嶽及び拝所が合祀された場所を取り囲む空間は、大嶺は周囲が崖で独立して整備され、当間は隣接して字のゲートボール場が整備

され、安次嶺・金城では都市公園として御嶽が整備され、鏡水では火の神を中心とする拝所が字公園として再建された。戦前は近づくことも恐れられていた御嶽や火の神が公園として空間整備されたことにより空間の質は変容していることが推測される。

御嶽及び拝所の移設再建の過程から、①沖縄の民俗空間認識において小高い場所はそもそも「シジラカサン」といって人が住むには恐れ多い場所とされていた、②御嶽は小高い場所にあるべき、③井戸など生活に密接にかかわる拝所が碑として再建されるほど大切にされている、という3つの継承と、④公園として整備されるなど御嶽の空間的な質の変容、⑤合祀されるなど集落に点在していた井戸などの拝所が一箇所に集約される、という2つの変化が明らかになった。

5-2. 村屋(現自治会館)の再建について

村屋(現自治会館)の建設については、最初から新部落建設用地の中の利便性の高い場所に2宅地分の用地を使って建設位置を確保した鏡水と同じく新部落建設用地内だが旧日本兵の遺体が出てきたため宅地用地として引き取り手がない土地を自治会館の場所にした安次嶺が5字の中では当初から配置した字で、その他、新部落用地内で事情を話して権利を譲ってもらった当間²⁵⁾、新部落建設用地内には確保できず隣接する用地を買った大嶺がある。金城はやや遅れて1967年に割当土地であった字田原に再建している。

村屋の立地場所について、御嶽及び拝所のような空間秩序はなかったが、建設時期をたずねると、金城以外どこも新部落内の個々の住宅建設と前後して建設されたということから、戦前、終戦直後、そしてその後も集落内の重要な施設であったことが読み取れる。

5-3. 宗家の配置と土地の序列について

戦前の集落が持っていた、宗家と分家の関係は、鏡水で限定的に継承されたのを例外に、戦後の字の中では継承されない傾向がみられた。鏡水では各戸のくじ引きに先立って最も位の高い宗家2つは優先的に敷地を選べたということである。優先的に敷地を選べた宗家が選んだ場所はメインストリートに面し、宅地の階級が1等地であり、かつ緩斜面に再建された新部落域の中では斜面の最上部の敷地である。大嶺や当間、金城では、宗家なども関係なくまったく公平にくじを引き、安次嶺では、新部落の再建に貢献した功労者の家に敬意が払われ、くじ引きに先立って優先的に場所を選べたということである。優先的に場所を選べた功労者が選んだのは、メインストリートに面し、「1の上」と階級付けられた角地である(図 12)。

優先的に宅地用地を選べた鏡水・安次嶺の人の選好では、戦前の沖縄の集落空間が持っていた御嶽の近くといった相対的な立地的要素ではなく、宅地の格付けの高さが第一に評価に影響したことがヒアリングで確認された。これは、1から10等地まで格付けがされた図を目の前にして選んだことを考えると当然ともいえる。

また、ヒアリングによると当間では、御嶽の傍の開発に対する忌避意識と土地の序列意識は戦後も継続されていた。新部落建設時とは時期を異にするが当初メンバーではなかったために宅地のなかったノロ家と根家に、新部落建設で各家の開発が一段落した後、字からお願いする形で、御嶽用地として字が保有していた土地の一部を分割しそこに住んでもらうというを行っている。

5-4. 道と家の向きについて

道に関しては、期成会が区画を設計した段階で、伝統的な南面接道

型の区画は無くなり、背割り線を持つ現代的な区画となっている。しかし、当間だけは全体の区画整理の後、各戸が南面するように字で独自に道路用地を再整備している(図 12)。当間で独自に整備した道の幅員は、期成会が設計したその他の道路よりもずっと狭く、戦前の広い集落道の幅員と同じ9尺で、道路に面する両側の家から4尺5寸ずつ敷地を提供してもらい整備を行ったという。

この理由について、当時設計および住民の交渉を担った当間集落の長嶺敏博氏によると、当間集落が建設された場所がちょうど南東方向へ下降する斜面地に当たったため、期成会による背割型の住宅地の場合、北入りになる住宅地は住戸の2階部分から入らなければならなくなるためであるということであった。つまり、戦前の南入りの住宅地の形にこだわったというよりも、各家の住宅建設の必要上から生まれたことだそうだ。

区画割による敷地の道路付けに関わらず、各家が南入りに建てられたのかどうかは、新部落建設当時の建築物に関する資料が残っていないことや、すでに大半の住宅が建て替えられていることから確認はできない。

5-5 集落毎の民俗空間および集落空間秩序継承の実態

5-1から5-4までは各要素で検討したが、これを集落単位で検討すると、鏡水とその他集落とで傾向の違いが生じていることがわかる(表3)。鏡水では、「拝所や自治会館を新部落建設用地内に計画的に最

初から配置した」「宗家がくじ引きで優先された」という要素をもつことから、伝統的な集落空間秩序が相対的に強く継承されたことが確認された。ヒアリングによると、鏡水では集落の宗家と神人の意見がかなり反映されたとの事であった。各要素の共通性はあるものの、民俗空間と集落空間秩序の継承の事実とその過程には集落毎の考え方の違いも影響を与えている。

また、戦前の集落の状況が戦後の再建に与えた影響は、御嶽の再建と集落の位置関係に若干見られた。元位置でもなく、新集落内でもない場所に御嶽が再建されたのは大嶺だけであるが、大嶺は戦前の集落でも御嶽は集落居住域からかなり離れた場所にあった。事例数がひとつであるため推測の域を超えないが、戦前の集落の形態が無意識下で影響を与えたことも考えられる²⁶⁾。

6. 本研究の成果と今後の課題

戦後、公的開発主体と計画主体・法制度が機能していない状況にあって、住民が自ら集落空間の再建計画を定め実施した過程は、通常は無意識的に継承され、場合によっては変容していく民俗空間に対して、集落空間全体の中で顕在化がなされるという意味で興味深い。また、まだ豊かとはいえない生活状況下で農地や宅地の利便性に直接つながらない民俗空間がどの程度重視されたのかという視点は、当時の住民の価値観を理解する上で重要な手がかりを得るものだとはいえる。本研究では、事例を通じ、以下のことが明らかとなった。

表3 集落別空間の変遷と特徴

	沖縄全体	大嶺	当間	安次嶺	鏡水	金城
集落概要		漁民集落		畑作集落	畑作集落 安次嶺の屋敷集落	
集落の地形	南下がりの緩斜面地	平坦地	南下がりの斜面地	平坦地	南下がりの緩斜面地	南下がりの緩斜面地
一番の御嶽	集落の開祖の墓	大嶺ノ嶽	当間ノ嶽	安次嶺ノ嶽	ミヤマシ	金城ノ嶽
御嶽と集落の位置	集落居住域背後に隣接・近接	集落居住域外	集落居住域背後に隣接	集落居住域背後に隣接	集落居住域外	集落居住域背後に隣接
集落構造と模式図		集落南部にある上ノ毛という聖地を背後に宗家が集中、分家は北部へもって発展	集落北西部に宗家が並び、南部に向かって発展	御嶽に隣接する根屋とその周囲の宗家から扇状に集落が展開	集落中央から北側に宗家が集中。分家が南部に向かって発展	金城の御嶽への入口部分に第一宗家。その他宗家が集中し、分家は南部に向かって発展
戦中の集落の状況	戦中の集落の状況	飛行場建設のため、1931年当初から日本軍によって接収	徐々に日本軍の飛行場が拡大していく中で接収			
戦禍	戦禍	壊滅的被害	敷地界はわかる	敷地界はわかる	壊滅的被害	敷地界はわかる
収被接	米軍による地形等の改変	上ノ毛(腰当森)	無し	安次嶺ノ嶽	ミヤマシ	金城ノ嶽
戦後混乱期と生活の制度	1945-51年: 臨時救済措置としての土地の割り当て 51-55年: 通称割当土地制度が制定され、賃借に法的位置づけが与えられる	村屋建設: 有 御嶽の移動: 無	村屋建設: 有 御嶽の移動: 有	村屋建設: 有 御嶽の移動: 有	村屋建設: 有 御嶽の移動: 無	村屋建設: 有 しかし、すぐに地主に反対され撤去。暫定的に区長の家を使用 御嶽の移動: 無
御嶽と集落の位置関係		集落と別離。御嶽は新部落建設の用地を取得後、個々の住宅建設が始まった頃に集落域外の小高い丘の上に再建され、その他の集落内の拝所も合祀されている	戦後すぐに村屋の近くに移動、その後、新集落用地内に、宅地には適さないといわれた丘陵地を買い取り移設再建される	戦後は、割当地近くの小高い丘の上に移設再建。その後、戦前に安次嶺ノ嶽であった場所が返還されたため、旧安次嶺ノ嶽の場所にすべての集落、その内拝所が合祀、新集落域とは離れている	第一の拝所であるミヤマシが自衛隊基地内に保存されたため、ミヤマシを元位置で再整備したほかは、新集落への移設再建せず。それ以外の拝所が集められ、集落域内に公園として整備	新部落建設後、やや遅れて再建された自治会館の裏手に移設再建されていたが、その後旧集落地の大部分が返還され、その際に旧御嶽に再建。集落内にあったその他の拝所も御嶽に合祀される
村屋(自治会館)		新部落用地内には確保できなかったため、新部落の建設が始まる頃に隣接地を新たに買収し建設	新部落建設後、宅地を個人に供与した時点では計画されていなかったが、その後すぐに事情を話し、一宅地分譲してもらって建設	新部落用地内に建設。宅地として引き取り手の無い場所を自治会館用地とした	新部落建設用地内に建設。新部落建設時から2宅地分の敷地を確保し計画的に配置	新部落用地内ではなく、宇田原の最初には割当土地の近くに建設。後に開放された旧集落に建設
宗家の配置		どの家もくじ引き	新部落建設当初はどの家もくじ引き。しかし、その後、御嶽の隣には野呂家と宗家があるべきだということで、御嶽用地および隣接地に野呂と宗家が居住する	宗家に対する優先的な配置は行われなかった。そのかわりに新部落建設の功労者が優先的に配置される権利を持ち、結果、メイン道路に面した角地に配置された	宗家2つは配慮され、その他の家とは区別されて先に家の場所を選ぶことが出来た。その結果、新集落内のメイン道路に面した高い場所に配置	新部落に配置された世帯が旧集落の中では一部分の世帯のため、特に無く、参加世帯で公平にくじ引き
道路と家の接道		背割りをもつ区画設計のまま全戸南面接道にはこだわらず	集落配分後、集落独自に区画を増やし、全戸南面接道の道路付けとする	背割りをもつ区画設計のまま全戸南面接道にはこだわらず	背割りをもつ区画設計のまま全戸南面接道にはこだわらず	背割りをもつ区画設計のまま全戸南面接道にはこだわらず

まず、原型もしくは原型に近い継承がされたものとして、村屋(自治会館)の重要性和小高い場所を聖なる場所として捉え開発を禁忌する空間認識、御嶽や拝所を重視する意識があげられる。

次に、原型からは変質・変形されて継承されたものとして、御嶽をとりまく空間の質的変容と拝所の変形が挙げられる。御嶽が公園として整備されることにより、近寄ることを恐れられた戦前の御嶽とは空間的に変質して継承されている。井戸や亀屋などの生活に関わる拝所は、御嶽に隣接して記念碑として合祀されたり、自治会館敷地内に移設されることにより、集落の中に点在していたもののがかなり小さな空間に囲われ集約される形で変形してしまっている。

継承がまったくもしくはほとんどされなかったものは、全戸南面接道を基調とした区画割り、宗家と分家の土地の序列である。

最後に、継承されたものを計画論として捉えてみると、小高い場所の開発に対する忌避性については、現行の法制度に基づいた計画的な位置づけが皆無である。「シジラカサン」の理念をどのように現在に反映させていくのが課題となる。また、本研究の調査した拝所は、コンクリートブロックで再建されるなど原形をとどめておらず、さらに点在していた拝所等が一箇所に集められてしまったため、本来の生活の「場」との関係性まで失われてしまっており、今後その価値をどのように計画論として捉えるのか検討が必要である。

【謝辞】本研究を進めるにあたり、熱心にゆんたくして下さった地域の先輩方、研究を助成して頂いた沖縄銀行おきぎんふるさと振興基金に謝意を表します。

参考文献

- 1) 仲松弥秀:神と村, 伝説と現代社, 1975
- 2) 伊徒勉:琉球祭祀空間の研究, 中央公論美術出版, 2005. 4
- 3) 笹谷康之・小柳武和・志摩邦雄:海岸における聖域の研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, 1991. 11, No. 26, pp. 451-456
- 4) 新田佳代, 林 まゆみ:農村祭祀空間の場所性と地域住民との関係性に関する研究: 淡路島北淡町の事例から, 農村計画学会誌, 第4集, pp. 211-216, 2002
- 5) 坂本磐雄:沖縄の集落景観, 九州大学出版会, 1989. 4
- 6) 石丸紀興:名護市における戦災と戦災復興計画に関する研究-戦災復興計画研究その2-, 日本都市計画学会学術研究論文集, No. 22, pp. 127-132, 1987. 11
- 7) 池田孝之:戦後沖縄都市計画の法制と市街地形成に関する実証的研究, 昭和61年度文部科学研究費補助金, 研究成果報告書(課題番号 60460182), 1987
- 8) 池田孝之:戦後沖縄の都市計画における米国統治政府の影響, 日本都市計画学会学術研究論文集, No. 24, pp. 595-600, 1989. 11
- 9) 小禄村誌発行委員会:小禄村誌, ゲンダイ経営出版社, 1992
- 10) National Archives and Records Administration (U.S.), 28th Feb. 1945, ON24145-ON24146, ON23972
- 11) 宇次嶺向上会・宇次嶺自治会:大嶺の今昔, 若葉印刷社, 1983
- 12) 鏡水自治会:鏡水 80 周年記念誌, 比嘉興文堂, 1983
- 13) 鏡水自治会:鏡水 100 周年記念誌, 比嘉興文堂, 2003
- 14) 金城自治会:金城会館落成記念誌, 1992. 6
- 15) 那覇市都市計画建設部・小禄金城地区土地区画整理地主会:小禄金城まちづくりの歩み, 1997
- 16) 沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール:旧小禄村宇次嶺調査報告書〜那覇市赤嶺・時代の変遷とコミュニティの変容〜, 1993
- 17) 日本建築学会編:図説集落-その空間と計画, 都市文化社, 1989. 8
- 18) 三村浩史・地域共生編集委員会編著:地域共生のまちづくり-生活空間計画学の現代的展開, 学芸出版社, 1998. 8
- 19) 砂川恵進:戦後沖縄の借地法制, 琉大法学第6号, pp. 51-92, 1965

注

⁽¹⁾ 現在では、こうした周囲論の民俗文化の捉え方は、言語体系以外の複雑な習俗を対象とする研究視角としては否定されている。

⁽²⁾ 予備的な調査として、習俗が類似する同じ旧小禄村内の12集落中10集落に対し、現在の拝所等での拝みや年中行事の状況や維持管理等のヒアリングを行った。これは、接収された事より集落の年中行事や拝所の数など習俗が、大きく改変または衰退し分析の対象として特殊すぎることはないかを検討するためである。予備検討の結果、接収による集落の移転の有無と年中行事や拝所の数などに関係性は見られなかった。

⁽³⁾ 主なヒアリング相手は、宇次嶺自治会会長新崎政吉氏(昭和13年生)、郷友会会長平良幸次郎氏(昭和14年生まれ、鏡水の第一門中の宗家長男)・新垣勇一氏(昭和15年生)、当間自治会会長赤嶺幸男氏(昭和17年生)、村役場職員として期成会が新部落

を建設する際に測量に携った長嶺敏博氏(昭和9年生)・赤嶺朝栄(昭和8年生)、宇安次嶺自治会会長当間清喜氏(昭和21年生)・副会長赤嶺秀正氏・具志朝盛氏(昭和8年生・老人会の元会長)・当間昭一氏(昭和6年生)・長嶺源三氏(大正15年生)・前自治会長当間清喜氏・現自治会長赤嶺秀正氏、元金城建設委員長の上原久仁夫(大正13年生)氏・赤嶺實(大正9年生)氏・現自治会長の赤嶺清氏(昭和12年生)、赤嶺自治会会長長嶺真次氏(昭和27年生)、小禄自治会書記上原文史(1961年に小禄に嫁いで45年居住、書記暦は18年)、宇宇榮原自治会事務員宮城文史、高良自治会会長具志進(昭和17年生)、当間自治会会長金城栄行(昭和13年生)、である。

⁽¹⁴⁾ 沖縄大百科事典、上、p. 294

⁽¹⁵⁾ 現在沖縄の文化財課等が作成する歴史民俗地図などにおける「御嶽」は、1713年に編纂された『琉球国由来記』に記載されているものを対象として作成されていることが多く、その後、分岐した比較的新しい集落などで拝まれている御嶽は含まれていないことがある。そのため、実際の地域で「御嶽」と呼ばれているものよりも数が少ない。

⁽¹⁶⁾ 戦前の民俗地図に書かれている各家の屋号名を頼りに集落の発展を読み取る手法。例えば「平良(てーら)」と「前平良(めーてーら)」が隣接していること、平良が元からあり、そこから前平良が分家したと順序を読み、さらに、立地している位置関係から、どの方位を「前」とみなしたのかの民俗方位を読み解く。本研究では集落の発展の方向を読み解くのに使用した。

⁽¹⁷⁾ 屋取集落とは、氏族の帰農によって沖縄本島の各地で形成された小村落、百姓村とは形態が異なる。沖縄本島の約600の村落のうち138が屋取起源の村落となる。沖縄大百科事典、下、p. 730より

⁽¹⁸⁾ 参考文献16)より。小禄村誌では、1933年海軍によって建設開始、とある。

⁽¹⁹⁾ 参考文献16), pp. 23-25

⁽²⁰⁾ 那覇市史資料編第3巻の1、p. 327、立ち退きに関する陳情書から

⁽²¹⁾ 割当土地制度とは、「民間人収容所から旧居住地への帰村に際し、自分の土地にもどれない人々のために、市町村長や米軍地区隊長の権限で必要な土地を割り当てて無償で使用させようとする特別制度(沖縄大百科事典)」であり、いくつかの制度変遷をたどる。まず、終戦直後、1945年10月23日交付の米国海軍政府指令第29条「旧居住地移住の計画と方針」に基づく、臨時的行政的な措置であった時期、次に、1951年9月に沖縄群島政府が「沖縄群島割当土地に関する臨時処理条例」(通称「割当土地制度」)が制定され、「みなす契約」に基づく賃借権が認められた時期、1966年9月借地法への移行時期である(文獻19)より。借地人と地主を巡るトラブルの様子や、制度改変期の混乱の様子は当時の新聞でも伝えられている。

⁽²²⁾ ただし、金城はこの後、村屋を建設した場所の地主から抗議があり、一度建てた村屋を壊し、以降は新部落建設まで区長の家を代理として使っていた。

⁽²³⁾ 旧暦3月3日に行われる沖縄地方独特の女性のお祝い

⁽²⁴⁾ 集落構造に関してこの時期の考察を行うことは出来ない。なぜなら、疎開先からの引き揚げによって、順次、旧小禄村内に割当され字毎で集住できなかったためである。そのため御嶽や宗家との関係などの空間秩序を継承することはなかった。

⁽²⁵⁾ 「部落」には差別用語の意があるが、沖縄では集落とほぼ同義で用いられており、また当時集落再建に当たって「部落」と自ら呼称していたため本研究では原資料の表記やヒアリングで得られた言葉に準じて使用している。

⁽²⁶⁾ 新部落建設の陳情書は1953年1月27日に琉球政府行政主席であった比嘉秀平氏に提出されたもので、陳情書の代表は小禄村村長嶺秋夫となっている。

⁽²⁷⁾ 小禄村誌p60、および宇次嶺水でのヒアリングによる。

⁽²⁸⁾ 高低差の数値は測量を担当していた長嶺敏博氏へのヒアリングによる。

⁽²⁹⁾ もちろんこれは統計学的には誤りで、普通に代表者1名がくじ引きをしても順番によって有利不利が出ることは無い。しかし、新部落建設がそれだけ慎重に熱心に進められたことを物語るエピソードである。

⁽³⁰⁾ 本人が他界しているため確認不可能だが、沖縄県で最も早い区画整理の技法に近い市街地整備は戦後1946年に名護市で行われた。沖縄県以外の日本の戦災復興区画整理よりも早く、その技術が持ち込まれたと推測しえる。しかし、当時役の部下として同じ村役場で働いていた長嶺氏らは高良氏がサイパンからの南洋帰りで、アメリカの生活を早くから経験していたことからこのような道路幅と区画割りを実現したのだと話す。

⁽³¹⁾ 測量と区画割の実際の図面は、写真1のようになっており、これよりも精緻なものは実際に現地で、米軍が残した電線を使って区画割りをしていたという。

⁽³²⁾ ヒアリングをした安次嶺の居住者が所有していた当時の計算表より計算、安次嶺には9等地10等地が無いため、それらの単価は不明。

⁽³³⁾ この他にも、小禄・金城の区画整理では、「(昔の御嶽があった丘陵上の)赤嶺緑地の部分に自分の住宅地を換地された人は、「シジラカサン(セジ高い)」といって嫌がった」という証言がある。

⁽³⁴⁾ 「選拝所」や「お通し場」はどちらも同じ意味で、正式に拝む対象の場が遠かったり、簡単に近づけなかったりする場合に、そこで代わりに拝むことによって、本来の拝み場所を拝んだことにするという場所である。代替拝所という観念である。

⁽³⁵⁾ 当間では、当初自治会館建設用地が無かった為に、集落用地としてあった御嶽用地の下部の一部を分筆し、そこに建設してはどうかという提案が青年会からされたが、地域の先輩に反対され、結局、新部落用地内に宅地の権利を持っていた他字出身の居住者1人をお願いをして譲ってもらった場所に建てたという。

⁽³⁶⁾ 現在は、年中行事の道ジュネーの際、他の集落を通して御嶽まで行かねばならないことの不具合から、集落の近くに移設することが検討されているとの事である。

(2006年11月10日原稿受理、2007年4月19日採用決定)